大学生の親密度の異なる友人への自己開示と親和動機の関係

武田裕子*・前田健一*・徳岡大*・石田　弓*

The relation between self-disclosure to friends of three different levels of intimacy and affiliation motive in university students

Yuko Takeda*　Kenichi Maeda*　Masaru Tokuoka*　Yumi Ishida*

The purpose of this study was to investigate the influences of three levels of intimacy of friendship (newfound friend, potential best friend, and best friend), two affiliation motives (affiliative tendency and sensitivity for rejection) and the four levels of depth of self-disclosure (from level one to four) on self-disclosure of university students. One hundred and eighty students completed one of three questionnaires that differed in intimacy levels of friendship. The results showed that the deeper levels of contents (level three and four) were more likely to be disclosed to best friend than to potential best friend and newfound friend. In addition, it was found that students for high group than for low group of affiliative tendency and sensitivity for rejection showed more self-disclosure. The implications of the findings for clinical relationship between counselor and client were discussed.

Key words:　Self-disclosure, Friendship, Affiliation motive

問題と目的

自己開示の定義

自己開示（self-disclosure）という用語は，Jourard（1971）によって「個人的な情報を他者に

*広島大学大学院教育学研究科（Graduate School of Education, Hiroshima University）

知らせる行為」として定義され，初めて心理学用語として使用された。それ以来，自己開示の心理学研究は盛んに行われてきたが，それに伴い定義も多様化してきた。榎本（1997）は「自分がどのような人物であるかを他者に言語的に伝える行為」と自己開示を定義している。すなわち，自分の性格や身体的特徴，考えていること，感じていること，経験や境遇など，自己の性質や状態を表す事柄を他者に話すことであるとしている。本研究では，基本的に榎本（1997）の定義に従うことにする。

対人関係における自己開示の機能

自己開示における被開示者は，開示者から大切な情報が開示されることで，自分は開示者から信用されているとか，開示者は自分に対して心を開いていると認識する。このような認識によって，被開示者も開示者に対して心を開き，自己に関する情報を徐々に開示していく（Jourard & Friedman, 1970; Worthy, Gary, & Kahn, 1969）。人は，このような互恵的かつ動的な相互作用プロセスを通して，他者との親密な対人関係を育んでいく（Reis & Shaver, 1988）。Waring & Reddon（1983）や Waring（1988）は，他者に自己開示する能力が親密な対人関係を発展させるのに重要な要因となること，また親密な自己開示が対人関係に対する満足の重要な予測因子であることを見出している。特に，情緒的な自己開示ができる人は満足度の高い対人関係を結ぶことができるとされている。このように自己開示は対人関係を親密にする機能を果たす。

親密度と自己開示

榎本（1997）は大学生を対象に，実際の自己開示量ではなく，自己開示のしやすさ・しにくさ（自己開示難易度）を指標にした調査を実施し，親友に対しては，あらゆる側面で開示しやすいこと，しかも話しやすい側面と話しにくい側面の開示量の乖離が小さくなることを明らかしている。一般に，人は異性の友人よりも同性の友人に対して，また親密度の低い友人よりも高い友人に対して自己開示しやすいと考えられている。しかし，Altman（1973）によると，自己開示量は親密度の関数として単調増加関数的に増えるとは限らないという。親密度が低い場合には浅い自己開示が多く，深い自己開示は少ない。それに対して，親密度が高くなると，浅い自己開示が減少するが，それだけでなく深い自己開示も同様に低下するという。このように親密度が低い場合と高い場合では，自己開示する内容の深さや深刻さが異なることは経験的にも理解できるが，親密度と自己開示量の関係については必ずしも一貫した研究結果が得られていないのが現状である。

自己開示の深さ

Altman & Taylor（1973）の社会的浸透理論の枠組みでは，相手との関係性に応じて，自己開

示の深さが異なると考えられている。この点を明らかにするために，丹羽・丸野（2010）はAltman & Taylor（1973）の理論的枠組みに基づいて，自己開示内容の深さをレベルⅠからレベルⅣまで測定できる自己開示尺度を作成している。それによると，レベルⅠは趣味に関する内容である。これは，一般的な自分の好みについての情報であり，特に社会的常識から逸脱する趣味ではない限り，人格を疑われたりするものではない。レベルⅡは，容易には克服できない困難な経験に関する内容である。これは，自分がこれまで経験してきた「つらい体験」やそれをどう乗りこえてきたかに関する情報である。これらの情報は，開示者の性格特性そのものを直接言い表してはいないが，開示者の現在の性格特性に何らかの影響を及ぼしているものと考えられる。レベルⅢは，決定的ではない欠点や弱点に関する内容である。これは，それほど重要ではないが未熟と思われる自分自身の認知や情動の側面である。認知や情動は自分自身の人となりを示す。ただし，レベルⅢの欠点や弱点は，それを知ることによって開示者に対する評価が決定づけられるほど重要なものではないとされる。レベルⅣは，自分の性格や能力の否定的側面に関する内容である。レベルⅢとは異なり，レベルⅣの自己開示は，それによって開示者が修復不可能なほどに否定的に認識され，これまで構築してきた親密な対人関係が脅かされる危険性をはらむとされる（丹羽・丸野，2010）。

丹羽・丸野（2010）は，自己開示内容のレベルⅠからレベルⅣまでの自己開示尺度を用いて，同性の初対面者に対する自己開示量と，すでにある程度仲の良い同性の友達に対する自己開示量を比較検討している。その結果，被開示者が初対面か親しい友達かにかかわらず，レベルⅠの浅い自己開示が最も多く，レベルⅣの深い自己開示が最も少なかった。また，レベルⅢやⅣの深い自己開示は，初対面者よりも親しい友達に対して多かった。この結果について，丹羽・丸野（2010）は関係構築の初期段階は差し障りのない表層的な自己開示に留めるが，相手との関係性が親密になるにつれて，人は自分のことを相手にもっとよく知ってもらいたいと思い，自己開示をより多く行うためであると考察している。また，レベルⅠ・Ⅱのような表層的な自己開示も，初対面者よりも親しい友達に多いことについては，状況によっては被開示者との対人関係が親密であっても深層的な自己開示を抑制し，表層的な自己開示をしている可能性があると考察している。

親和動機と自己開示

人は他者と親しくなりたいために，相手に自分のことを知ってもらいたいと思い，自己開示をすると考えられている（榎本，1997）。これは，なぜ自己開示を行うかの動機に関する側面である。丹羽・丸野（2010）は親和傾向と拒否不安から構成される親和動機を取り上げ，親密

な対人関係を維持したいと思う親和傾向と自己開示との関係を検討した。その結果，初対面者に対するレベルⅣの自己開示を除いて，親和傾向が高い人ほど自己開示しやすい関係にあることが明らかになった。

丹羽・丸野（2010）は初対面者と親しい友人の比較を通して，親和動機の一側面である親和傾向と自己開示の関係を検討しているが，「知り合ったばかりの友人」，「これから親しくなりたいと思う友人」，「親友」のように，友人の中でも親密度が異なる場合にも自己開示量に同様の相違が生じるのか，あるいは親和動機と自己開示の関係に同様の関係が見られるのかを検討していない。そこで本研究では，被開示者を友人に統一しながらも，友人との親密度を操作し，３種類の友人を設定して，自己開示に及ぼす友人との親密度の影響を検討することにした。

また，丹羽・丸野（2010）は親和動機を取り上げながら，拒否不安と自己開示との関係については検討していない。杉浦（2000）によると，親和動機を構成する拒否不安は，相手から拒否されてひとりぼっちになることを避けようとする性質を持つとされる。拒否不安は対人疎外感に正の影響を及ぼすのに対して，親和傾向は対人疎外感に負の影響を及ぼすことが示されている（杉浦, 2000）。また，「拒否されたくない」という気持ちを強く持つと，本音を出すことを避け，希薄な人間関係になる事例が報告されている（大平，1995）。さらに，深い内容を自己開示することは，相手から拒否されたり否定的に認知される可能性があり，ひいては親密な対人関係が脅かされる危険性をはらむ可能性もある（丹羽・丸野，2010）。これらの研究結果や知見を参考にすると，相手から拒否されることを避けようとする拒否不安の高い人は，友人との親密度の高低にかかわらず，深い内容については一貫して自己開示しないことも予想される。このように，親和傾向とは同様の結果にならない可能性もあるが，現在のところ拒否不安と自己開示の関係を親和傾向と自己開示の関係と比較した研究は見られない。

本研究の目的

以上の点を踏まえて，本研究では友人との親密度，親和動機（親和傾向，拒否不安），自己開示内容の深さの３つの要因が大学生の自己開示量に及ぼす影響を検討することを目的とする。

方法

調査対象者　調査対象者の中から，欠損値のある回答者を除いた 180 名（男性 61 名，女性 119 名）を分析の対象とした。平均年齢は 19.62 歳（SD = 1.22）であった。

質問紙の構成　1）友人との親密度　自己開示における被開示者として「知り合ったばかり

の友人」,「これから親しくなりたいと思う友人」,「親友」の3種類の同性友人を設定し，開示者にとって被開示者（友人）との親密度が異なるように操作した。ただし，友人との親密度の操作に伴い，調査対象者が想定する被開示者の受容性・共感性あるいは自己開示量に相違が生じないようにするために，被開示者としての友人は「話をきちんと聞き，共感してくれる（してくれそうな）人」であり，「自分の話をしてくれる人」であるという教示文を提示し，友人の受容性・共感性および友人からの自己開示量を統一した。調査対象者は，3種類の友人のうち，いずれか1種類の友人を設定した調査用紙を受け取り，その友人を想定して，以下の尺度に関する質問に回答するように求められた。**2）親和動機**　杉浦（2000）の親和動機尺度を使用した。この尺度は「人と深く知り合いたい」,「友達と非常に親密になりたい」などの「親和傾向」9 項目と,「誰からも嫌われたくない」,「友達と対立しないように注意している」などの「拒否不安」9 項目の計 18 項目からなる。各項目が他者との関わり方についての自分の気持ちにどの程度あてはまるかを「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」の5段階評定法によって評定させた。**3）自己開示の深さ**　丹羽・丸野（2010）の自己開示尺度を使用した。この尺度は自己開示内容の深さがレベルⅠからレベルⅣまでの項目からなる。レベルⅠは,「趣味にしていること」,「楽しみにしているイベント」などの自分の趣味に関する7項目であった。レベルⅡは,「つらい経験をどのように乗りこえてきたかということ」,「過去のつらい経験が現在どのように役に立っているかということ」などの自分の困難な経験に関する4項目であった。レベルⅢは,「直さなければならないと思っているが，なかなか直らないささいな欠点」,「『少しダメだな』と前から思っているところ」などの自分の不変的行動傾向の決定的ではない欠点や弱点に関する6項目であった。レベルⅣは,「自分の性格のすごく嫌いなところ」,「能力や劣等感を抱いているところ」などの自分の否定的な性格や能力に関する7項目であった。レベルⅠからⅣまで合計24項目から構成される。各項目をどの程度話すと思うかを「1. 何も話さない」から「7. 十分に詳しく話す」の7段階評定法で評定させた。

調査手続き　調査は大学の講義時間の一部を利用して集団形式で実施した。しかし，男性の調査対象者が少なかったため，男子大学生を対象に追加調査を実施し，男子大学生のデータを追加した。

結果

自己開示と親和動機の下位尺度の基礎統計量　自己開示尺度については丹羽・丸野（2010）と同様に，レベルⅠ，レベルⅡ，レベルⅢ，レベルⅣの下位尺度別に得点化した。親和動機尺

Table 1
自己開示と親和動機の下位尺度のM，SD，α係数および相関係数

	M	SD	α係数	①	②	③	④	⑤	⑥
自己開示									
レベルⅠ（①）	5.73	0.99	.87	—					
レベルⅡ（②）	3.79	1.29	.76	.34 ***	—				
レベルⅢ（③）	4.00	1.35	.89	.22 **	.59 ***	—			
レベルⅣ（④）	3.38	1.37	.91	.18 *	.65 ***	.84 ***	—		
親和動機									
親和傾向（⑤）	3.78	0.68	.85	.35 ***	.31 ***	.20 **	.17 *	—	
拒否不安（⑥）	3.40	0.78	.86	.14 †	.11	.05	.05	.44 ***	—

$^{\dagger}p < .10$, $^{*}p < .05$, $^{**}p < .01$, $^{***}p < .001$.

度についても杉浦（2000）と同様に，親和傾向と拒否不安の下位尺度別に得点化した。各下位尺度1項目あたりの平均値（M），標準偏差（SD），α係数および相関係数を算出し，それらをTable 1に示す。

自己開示と親和動機の下位尺度における性差　自己開示尺度と親和動機尺度について性差を検討するため，自己開示4下位尺度と親和動機2下位尺度の得点別にt検定を行った。その結果，自己開示4下位尺度と親和動機2下位尺度のいずれの得点においても有意な性差は確認されなかった（$t(178) = -.30$ ～ 1.65，いずれも$n.s.$）。そこで以降の分析では男女を一括した。

親密度，親和傾向および自己開示の深さと自己開示量の関連　親和傾向の平均値に基づいて，調査対象者を親和傾向高群と低群に分類した。友人（被開示者）との親密度（知り合ったばかりの友人，これから親しくなりたい友人，親友）と親和傾向（高群，低群）を組み合わせた各群の人数と自己開示の深さレベル別の自己開示量の平均値と標準偏差をTable 2に示す。友人との親密度，親和傾向の高低，自己開示の深さを要因とする3（親密度）×2（親和傾向）×4（自己開示の深さ）の3要因分散分析を行った。その結果，親密度（F（2, 174）= 11.28, $p < .001$），親和傾向（F（1, 174）= 10.00, $p < .01$）および自己開示の深さ（F（3, 522）= 266.66, $p < .001$）の主効果が有意であった。親和傾向の主効果については高群の自己開示量が低群よりも有意に多かったが，親密度と自己開示の深さについては多重比較を行った。その結果，親密度については，親友」に対する自己開示量が「知り合ったばかりの友人」や「これから親しくなりたい友人」よりも多かった（親友＞知り合ったばかりの友人は$p < .001$，親友＞これから親しくなりたい友人は$p < .01$）。自己開示の深さについては，レベルⅠの自己開示量が他のレベルよりも多く，レベルⅢはレベルⅡとⅣよりも，レベルⅡはレベルⅣよりも多かった（レベルⅢ＞レベルⅡは$p < .01$，その他はいずれも$p < .001$）。

Table 2
親密度，親和傾向および自己開示の深さ別の自己開示量の*M*と*SD*

親密度	知り合ったばかりの友人		これから親しくなりたい友人		親友	
親和傾向	低	高	低	高	低	高
n	29	33	29	27	33	29
自己開示の深さ						
レベルⅠ	5.34	6.15	5.49	5.91	5.47	6.03
	(1.02)	(0.71)	(1.28)	(0.83)	(0.81)	(0.90)
レベルⅡ	3.28	4.01	3.62	3.67	3.60	4.56
	(1.23)	(1.16)	(1.16)	(1.38)	(1.35)	(1.06)
レベルⅢ	3.27	3.48	3.78	3.94	4.39	5.16
	(1.32)	(1.08)	(0.87)	(1.35)	(1.31)	(1.15)
レベルⅣ	2.88	2.75	3.27	3.24	3.71	4.44
	(1.28)	(1.04)	(1.10)	(1.22)	(1.53)	(1.24)

（　）の数値は*SD*を示す。

交互作用については，親密度と自己開示の深さ（F（6, 522）= 9.38, $p < .001$）の交互作用が有意となり，親和傾向と自己開示の深さ（F（3, 522）= 2.24, $p < .10$）の交互作用が有意傾向を示した。最初に，親密度と自己開示の深さの交互作用について下位検定を行った。まず，自己開示の深さレベル別に親密度の単純主効果を検討した。その結果，自己開示の深さのレベルⅢとレベルⅣにおける親密度の単純主効果が有意（レベルⅢは F（2, 696）= 21.75, $p < .001$, レベルⅣは F（2, 696）= 17.65, $p < .001$）であり，レベルⅡでは親密度の単純主効果が有意傾向を示した（F（2, 696）= 2.71, $p < .10$）。多重比較の結果，レベルⅢとⅣの自己開示量は「親友」に対して最も多く，次に「これから親しくなりたい友人」となり，「知り合ったばかりの友人」に対して最も少なかった（親友＞これから親しくなりたい友人，知り合ったばかりの友人は $p < .001$，これから親しくなりたい友人＞知り合ったばかりの友人は $p < .05$）。レベルⅡの自己開示量は「親友」に対して最も多かった（いずれも $p < .05$）。

次に友人との親密度別に，自己開示の深さレベルの単純主効果を検討した。その結果，知り合ったばかりの友人，これから親しくなりたい友人，親友のいずれの親密度においても自己開示の深さの単純主効果は有意であった（知り合ったばかりの友人では F（3, 522）= 135.84, $p < .001$，これから親しくなりたい友人では F（3, 522）= 97.62, $p < .001$，親友では F（3, 522）= 51.97, $p < .001$）。多重比較の結果，知り合ったばかりの友人とこれから親しくなりたい友人では，レベルⅠの自己開示量が他のレベルよりも多く，レベルⅡとⅢはレベルⅣよりも多かった（いずれも $p < .001$）。親友では，レベルⅠの自己開示量が他のレベルよりも多く，レベルⅢはレベルⅡやレベルⅣよりも多かった（いずれも $p < .001$）。

Table 3
親密度，拒否不安および自己開示の深さ別の自己開示量の*M*と*SD*

親密度	知り合ったばかりの友人		これから親しくなりたい友人		親友	
拒否不安	低	高	低	高	低	高
n	36	26	29	27	36	26
自己開示の深さ						
レベルⅠ	5.60	6.01	5.67	5.72	5.67	5.82
	(1.09)	(0.69)	(0.97)	(1.24)	(0.88)	(0.91)
レベルⅡ	3.35	4.11	3.62	3.49	3.81	4.38
	(1.34)	(0.95)	(1.30)	(1.22)	(1.24)	(1.33)
レベルⅢ	3.17	3.67	3.83	3.89	4.60	4.96
	(1.31)	(0.95)	(1.04)	(1.22)	(1.19)	(1.40)
レベルⅣ	2.68	2.98	3.19	3.33	3.73	4.49
	(1.29)	(0.93)	(1.13)	(1.20)	(1.33)	(1.50)

（　）の数値は*SD*を示す。

親和傾向と自己開示の深さの交互作用についても，同様の下位検定を行った。その結果，自己開示の深さのレベルⅠ，ⅡおよびⅢにおける親和傾向の単純主効果が有意であった（レベルⅠではF（1, 696）= 11.34, $p < .001$，レベルⅡではF（1, 696）= 10.75, $p < .01$，レベルⅢではF（1, 696）= 4.66, $p < .05$）。いずれも親和傾向高群の自己開示量が低群よりも有意に多かった。また，親和傾向高群と低群における自己開示の深さの単純主効果が有意であった（親和傾向低群ではF（1, 522）= 118.10, $p < .001$，親和傾向高群ではF（1, 522）= 150.10, $p < .001$）。多重比較の結果，親和傾向低群ではレベルⅠの自己開示量が他のレベルよりも多く，レベルⅢはレベルⅡとレベルⅣよりも多かった（いずれも $p < .001$）。一方，親和傾向高群では，レベルⅠの自己開示量が他のレベルよりも多く，レベルⅡとⅢはレベルⅣよりも多かった（いずれも $p < .001$）。

親密度，拒否不安および自己開示の深さと自己開示量の関連　拒否不安の平均値に基づいて，調査対象者を拒否不安高群と低群に分類した。友人（被開示者）との親密度（知り合ったばかりの友人，これから親しくなりたい友人，親友）と拒否不安（高群，低群）を組み合わせた各群の人数と自己開示の深さレベル別の自己開示量の平均値と標準偏差を Table 3 に示す。

友人との親密度，拒否不安の高低，自己開示の深さを要因とする 3（親密度）×2（拒否不安）×4（自己開示の深さ）の 3 要因分散分析を行った。その結果，親密度（F（2, 174）= 10.04, $p < .001$），拒否不安（F（1, 174）= 4.59, $p < .05$）および自己開示の深さ（F（3, 522）= 257.21, $p < .001$）の主効果が有意であった。親密度と自己開示の深さは Table 2 の分析結果と同様であった。拒否不安の主効果については，拒否不安高群の自己開示量が拒否不安低群よりも多かっ

た。また，親密度と自己開示の深さの交互作用（F（6, 522）= 9.38, p < .001）が Table 2 の分析結果と同様に有意であった。

考察

本研究の目的は，友人との親密度，親和動機（親和傾向，拒否不安）および自己開示の内容の深さの要因が，自己開示量にどのような影響を与えるのかを検討することであった。本研究の結果から，自己開示には複数の要因が影響を及ぼすことが示された。以下では，それぞれの要因が自己開示の程度にどのような影響を及ぼしているかを順に考察する。

まず，親密度の主効果から，親友に対する自己開示は，知り合ったばかりの友人やこれから親しくなりたい友人に対する自己開示よりも多く，友人関係の親密度の程度が自己開示量に影響することが示された。しかし，親密度×自己開示の深さの有意な交互作用の結果について詳細に検討すると，親密度の効果は自己開示の深さによって異なっていた。たとえば，レベルⅠ（趣味）のような浅いレベルでは，親密度の効果は見られなかった。しかし，レベルⅢ（決定的ではない欠点や弱点）やレベルⅣ（否定的な性格や能力）のような深いレベルでは，親友に対する自己開示が最も多いだけでなく，これから親しくなりたい友人に対する自己開示が知り合ったばかりの友人に対する自己開示よりも有意に多かった。丹羽・丸野（2010）では初対面の人と親しい友達に対する自己開示を比較した結果，レベルⅠ～レベルⅣのすべてにおいて初対面の人よりも親しい友達に対する自己開示量が多いことを見出している。本研究では初対面の人よりも親密度が高いと思われる友人関係を設定したことによって，レベルⅠとⅡ（困難な経験）ではこれから親しくなりたい友人と知り合ったばかりの友人の間に有意差が見られなかったのに対して，深いレベルⅢとⅣでは両者間に有意差が生じたと考えられる。

次に，自己開示の深さの主効果から，自己開示量はレベルⅠが最も多く，次いでレベルⅢ，レベルⅡとなり，レベルⅣが最も少ないことが示された。丹羽・丸野（2010）では初対面の人に対する自己開示量はレベルⅠが最も多く，次いでレベルⅡ，Ⅲ，Ⅳの順に低下した。それに対して，親しい友人に対する自己開示量はレベルⅠが最も多く，次いでレベルⅢ，Ⅱ，Ⅳの順に低下した。本研究の自己開示のレベル間の順位は，丹羽・丸野（2010）の親しい友達の場合と一致している。しかし，本研究の親密度別にレベル間の差を詳細に検討した結果，親友に対する自己開示はレベルⅠが最も多く，次いでレベルⅢとなり，レベルⅡとⅣが最も少なかった。レベルⅡとⅣの間に有意差が見られなかった点は，丹羽・丸野（2010）の親しい友達の場合と異なっている。また本研究では，これから親しくなりたい友人と知り合ったばかりの友人に対

する自己開示では，レベルⅠが最も多く，次いでレベルⅡとⅢとなり，レベルⅣが最も少なかった。レベルⅡとⅢの間に有意差が見られなかった点は，丹羽・丸野（2010）の初対面の人の場合と異なっている。丹羽・丸野（2010）の親しい友達については，「すでに仲がよいが，これから親しくなりたいと思っている同性の友達」と説明されている。本研究と丹羽・丸野（2010）では同一の自己開示尺度を使用していることを考慮すると，両研究間の結果の相違は開示者と被開示者の関係性を説明する表現の相違によるものと考えられる。

ところで，丹羽・丸野（2010）は親和動機を取り上げながら，拒否不安と自己開示との関係については検討していない。この点について本研究の結果から考察する。本研究では拒否不安の主効果が有意となり，自己開示量は拒否不安高群が低群よりも有意に多かった。この結果は，拒否不安の高い大学生は低い大学生よりも自己開示しないという予想に反する結果であった。また，拒否不安の高い大学生は，友人との親密度に関係なく，深いレベルでは自己開示しないと予想した。本研究では，拒否不安は自己開示の深さと交互作用を示さなかった。すなわち，浅いレベルでも深いレベルでも，拒否不安高群が低群よりも自己開示を多く示した。Table 1の相関係数を見ると，拒否不安は親和傾向と有意な正相関（r =.44, p <.001）を示している。この結果から，拒否不安の高い大学生ほど，親和傾向が強い関係にあることが示唆される。

杉浦（2000）によると，親和動機を構成する拒否不安は，相手から拒否されてひとりぼっちになることを避けようとする性質を持つという。また，拒否されたくないという気持ちが強い拒否不安の高い大学生は，他者との人間関係を築こうとするが，本音を出すことを避け，希薄な人間関係になりやすいという（大平，1995）。本研究の結果からは，拒否不安の高い大学生は，ひとりでいることを避け，人と関わろうとするので，拒否不安の低い大学生よりも自己開示量が多くなったと解釈される。しかし，拒否不安は親和傾向に比べて，自己開示と有意な正相関を示していないこと（Table 1）から，拒否不安の高い大学生と低い大学生の自己開示量の差はそれほど大きくないことが示唆される。

今後の課題

本研究の結果から，自己開示量に影響する要因が複数明らかになった。しかし，自己開示に影響する要因は，本研究で扱った要因の他にも多数考えられる。たとえば，外向性や内向性，ジェンダーなども自己開示に影響する要因として検討されている。このように，自己開示に影響を及ぼす要因は多様で，かつ複雑に絡んでいると考えられる。今後は，こうした多様な要因について体系的に検討し，どのような状況下で，どのような相手に，どのような内容であれば

自己開示しやすいのかを詳しく検討していく研究が求められる。

自己開示はカウンセリング場面でも重要である。榎本（1997）は，自己開示とカウンセリングに関する一連の研究から，カウンセリングがクライエントの自己への気づきを促進するものであり，また防衛的な態度の解除に向かうものである以上，クライエントの自己開示はカウンセリングが成立するための前提条件であり，カウンセリングの進行に伴って増大していくものであると述べている。どんなことでも無条件に受容し，傾聴してくれる治療者（カウンセラー）に対して，自分自身のことを率直に，十分に開示することによって，クライエントは自己への洞察を深めていくことができるのである。

本研究では，日常生活における友人に対する自己開示に焦点を当てた。しかし，日常生活における友人に対する自己開示とカウンセリング場面におけるカウンセラーに対する自己開示は，自己開示の動機や内容が異なるため，自己開示の程度も異なってくると考えられる。日常生活における友人に対する自己開示だけでなく，カウンセリング場面におけるカウンセラーに対する自己開示にも焦点をあてた研究が求められる。

引用文献

Altman, I. (1973). Reciprocity of interpersonal exchange. *Journal for the Theory of Social Behavior*, **3**, 249-261.

Altman, I., & Taylor, D. A. (1973). *Social penetration*: *The development of interpersonal relationship*. New York: Holt, Rinehart, & Winston.

榎本博明 (1997). 自己開示の心理学的研究 北大路書房

Jourard, S. M. (1971). *Self-disclosure: An experimental analysis of the transparent self*. New York: Wiley-Interscience.

Jourard, S. M., & Friedman, R. (1970). Experimenter-subject “distance” and self-disclosure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **15**, 258-282.

丹羽　空・丸野俊一 (2010). 自己開示の深さを測定する尺度の開発 パーソナリティ研究, **3**, 196-209.

大平　健 (1995). やさしさの精神病理 岩波書店

Reis, H. T., & Shaver, P. (1988). Intimacy as an interpersonal process. In S. Duck (Ed.), *Handbook of personal relationships*. Chichester, England: Wiley. pp.367-389.

杉浦　健 (2000). 2 つの親和動機と対人的疎外感との関係—その発達的変化— 教育心理学研究, **48**, 352-360.

Waring, E. M. (1988). *Enhancing martial intimacy through facilitating cognitive self-disclosure*. New York: Brunner/ Mazel.

Waring, E. M., & Reddon, J. R. (1983). The measurement of intimacy in marriage: The Waring Intimacy questionnaire. *Journal of Clinical Psychology*, **39**, 53-57.

Worthy, M., Gary, A. L., & Kahn, G. M. (1969). Self-disclosure as an exchange process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **13**, 59-63.